様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２５日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０１１１
研究課題名（和文）　玄証本及び旧高山寺本等の密教図像についての基礎的研究

研究課題名（英文）　Basic study for Esoteric iconographic image about Gensho-bon and formerly in Possession of Kozan-ji Temple

研究代表者
内田　啓一（UCHIDA KEIICHI）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：３０３２７９５２

研究成果の概要（和文）：本研究では、平安時代末期に密教事相僧及び図像僧として活躍した玄証書写、あるいは収集による密教図像及び京都・高山寺から近代になって巷間に流出した密教図像について、実査を通じてデータを集め、特色を考察するものである。調査所蔵先は３年間で、東京国立博物館、東京藝術大学大学美術館、個人蔵、サンフランシスコ・アジア美術館、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ニューヨーク市立図書館。実査では、法量・紙継や旧折り畳み幅を計測した。

研究成果の概要（英文）：This research considers the trait that is an esoteric iconographic image in the Heian period end that flowed out from priest Gensho and Kozan-ji temple in Kyoto. Gensho-bon and old Kozan-ji temple book also has the one that it is owned to the museum in Japan and foreign countries. And the collector own it. The in-depth data of those examples was accumulated, and it collected, it investigated, and basic data was accumulated while taking a photograph.
The investigation destination was done with Tokyo National Museum, Tokyo University of Art Museum, two or more individuals, Asian Museum in San Francisco, New York Metropolitan Museum, and Spenser Collection of New York Public Library for three years.
The investigation was done by using various forms. It is because of consideration of the restoration when it is in the state folded for instance and it thinks about the order situation
of Kamakura period. It is necessary to research more though each image also has the one to have already published in an academic journal. Each import and introduction persons problems remain.
It was able to find the development newly expected in relation to the problem of the image circulation put from the Heian period end on the Kamakura period.
A lot of problems of deriving by these basic researches will become the problem institutions progressive study.
Moreover, the by-product of a basic research on the image is to be able to catch a glimpse of the appearance of the work of art circulation in modern ages like the collectors existence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２００８年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
２００９年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１，８００，０００	５４０，０００	２，３４０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学、美術史
キーワード：玄証本・高山寺・密教図像・粉本・紙背墨書・箱番号

１．研究開始当初の背景

申請者は永年、密教図像研究をテーマとして取り組んでいるが、それは『図像抄』や『別尊雑記』、そして『覚禅鈔』などの図像集によるものであり、粉本も醍醐寺や仁和寺、そして東寺を中心とした図像と図像僧についての考察であった。玄証本及び旧高山寺本については、重要な図像研究テーマであることは認識していたが、実際に調査し、また、考察を加える機会をもたなかった。その重要性や図像としての稀少価値は極めて高く評価されるものであるので、本研究テーマとしたものである。

さらに、玄証本及び旧高山寺本は美術館・博物館で展観されることも少なく、実見の機会もめったにないのである。それゆえ、実査の必要性を強く感じていた。研究開始当初は各美術出版物やカタログ、所蔵品目録等によって図版のみ知られるもので僅かなデータのみ知られるものであった。粉本図像については、紙質や紙継、折り畳み幅、そして紙背墨書など重要な項目であっても、図版からの観察では入手できないものであった。美術史研究の基礎は実査にある。それ故、実査を通じて得られた必要なデータを集積し、玄証本及び旧高山寺本の研究の端緒とするものであった。

玄証については、土居宜次氏、石田尚豊氏らの研究があり、高山寺については、高山寺典籍調査団による研究成果が知られている。本研究では、それらの功績をベースにさらに図像そのものに焦点をあてて、基礎的な研究とするものである。

２．研究の目的

実査を通じて諸データを蓄積し、玄証本及び旧高山寺本を復元的に通観するものである。玄証本や旧高山寺本の裏書き墨書には箱番号や経蔵名が記されている場合が多く、それらを頼りにして、『高山寺経蔵目録』と対照させることで、旧蔵の経蔵を特定することができる。次いで、図像集類には収録されていない珍しい図像が多い点も特徴であるが、共通点と相違点、その傾向を考察し、それによって個々の図像についての特徴を見いだし、特色ある作例についてはさらに考察を試みる。さらに他図像への影響やひいては画像への展開を考えてみる。

紙背に捺印されている「高山寺」朱印については、年代的な詳細なる分類がすでに分析されており、それらをたよりに図像の帰属先分類を試みる。

また、逆に他からまったく独立した図像も見受けられ、相互に関連性のないものも確認し、単独図像としての位置づけをも可能な限り行いたい。

最後に転写方法についても実査を通じて見いだしてみたい。従来知られているように、図像転写には油紙などがもちいられたものがある。また、籠字によって明らかな転写図像である場合もある。図像の転写については図様の伝播という点からも、看過してはならない問題であり、技法や目的などを含めて、さらなる調査報告と考究が求められるものである。

３．研究の方法

第一段階として、『東京国立博物館所蔵品目録』、『東京芸術大学資料館所蔵目録』などをはじめとした各公的機関が発行する目録・図録類等によって玄証本及び旧高山寺本の所蔵確認を行い、本研究の調査対象を見いだした。国外から流出した在外の作例については、『在外秘宝』や『在外至宝』、さらに近年に行われたものでは、（財）東京国立文化財研究所が調査し、その成果を発行した『在外日本美術目録』が非常に役立った。また、各都道府県の美術館・博物館が発刊する『所蔵品目録』や『反町コレクション』等幅広く通覧することで、所在の確認を行う。

次いで、第二段階として、基本的には各所蔵者に調査依頼を提出し、許可された作例については実査を行うものである。実査では、法量の計測（縦×横、紙継幅、折り畳み幅等）とともにデジタルカメラにより詳細な撮影を行い、データを蓄積する。いわゆるまくりの状態であれば、紙背の撮影を行い、掛幅装の裏打ちによって紙背が判読しがたい場合は、通常の撮影によってデータを集積し、パソコン上で、反転・濃淡・コントラストなどの画像処理によって解読が可能となる場合もある。

なお、21 年度の調査所蔵先であるニューヨーク・パブリックライブラリーのスペンサー・コレクションについては、昭和女子大学

図書館を通じて、閲覧と写真撮影等の手続きを進めることができた。
　さらに第三段階として、注目すべき作例については、『高山寺典籍目録』の各経蔵目録などを用いて、旧所蔵の経蔵を特定し、図像そのものについては、『大正新脩大蔵経図像部』や『大日本仏教全書』などを活用して、図像的な特色について研究をすすめる。
　調査を行った所蔵機関は次のとおり。

平成 19 年度
東京国立博物館
　　図像　掛幅装８点、額装１点、巻子装１点　計１０点
東京藝術大学大学美術館
　　図像６点、画像１点　計７点
個人宅
　　図像 2 点　画像３点　計５点

平成 20 年度
サンフランシスコ・アジア美術館
　　図像３点　画像４点　計７点
個人宅（複数）
　　図像　３点　画像　７点　計１０点

平成 21 年度
ニューヨーク・メトロポリタン美術館
　　図像　８点　画像　４点　　計１２点
ニューヨーク・バーク財団
　　図像　５点　画像　３点　経典　２点
　　版画　３点　　計１３点
ニューヨーク市立図書館
　　スペンサーコレクション
　　図像　１８点　（すべて巻子装）
　　計１８点
個人宅
　　図像　２点　画像５点　　計７点
※画像の中には高山寺関係以外のものも含まれる。

また、公刊されている資料としては
『大正新脩大蔵経図像部』
『大日本仏教全書』
『真言宗全書』
『高山寺典籍目録』
『仏教図像聚成　六角堂能満院仏画稿本』
『勧修寺本覚禅鈔』
などを用いた。

４．研究成果

　玄証本には各図像集類にはみられない希有な図像が多く、しかも入唐八家以降に請来された宋本図像が多いことが挙げられる。また、高山寺では宝鼓台などの経蔵から流出した図像が多いことも確認できた。それらについての流出の時期は明治中期ころらしいが、明確な点は不明である。
　ここの図像については、他の作例に影響を与えたものやそのまま単一の図像として伝来したものなど様々である。玄証本には細部にわたっての詳細な転写本も多く、原本が著色画像と思われるものも含まれている。それは図像の多くに色注が記されている点からも想像されるのである。
　東京藝術大学大学美術館の所蔵図像は大学において、学生にありのままの形態を学習させるとの目的があるため、ほとんどか掛幅装などに改装されておらず、幸いにも流出した当初の姿であるものが多かった。さらには経蔵にて保管されていた状態と思われる包み紙も保存されており、原初形態を彷彿あるいはまさしく原初形態と判じられる貴重なものである。また、油紙図像や極めて薄手の楮紙が用いられて転写されているものがあり、図像転写についての典型的な手法を実見することができた。
　東京国立博物館での調査では、やはり希有な図像が多いこと、そして玄証本には緻密かつ詳細な転写が多いことが理解された。
　個人宅での請雨経府道場図については、図像としての美しさや面白さはないが、密教修法における道場図の重要性を痛感するとともに、事相僧にとってある修が忠実に伝播されていく流れを把握することができた。また、これは修法次第が文字だけによって後世に伝えられるのではなく、理解しやすいビジュアル・テクストによって伝来されるものであり、「文字」と「イメージ」の関係において、「イメージ」が効果的であることを示す資料としても興味深い。
　玄証本ではまた、入唐八家以降に請来された五代～宋と判じられる図像も多く、旧高山寺本の一特色である。唐本図像を多く収録するものとして、心覚撰『別尊雑記』が著明であるが、その原本図像と思われるものやさらに『別尊雑記』には収録されていない図像も多く、請来時期や請来者などを含めて、新たな請来品としての位置づけが可能である。また、請来した入宋僧やその時期などの問題が残されているが、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての図像流布の問題にもつながるものである。
　このことは 20 年度の調査で行ったサンフランシスコ・アジア美術館所蔵の文殊菩薩図像によって明かである。この興味深い問題点については、すでに『佛教藝術』310 号にて論文発表を行った。
　個人宅に所蔵される図像で、注目されたのは宇多法皇図である。墨書や注など記されておらず、実査当初は肖像主を特定することができなかったが、『仏教図像聚成　六角堂能満院仏画稿本』に所載される転写本図によっ

て、宇多法皇図であることが確認できた。江戸時代において、高山寺本が転写されており、それによって宇多法皇の名が知られたのである。従来知られていない画像であるので、今後研究対象としたい。この『仏教図像聚成六角堂能満院仏画稿本』には先の請雨経道場図を考察する際にもほぼ同一図像も転写されていることが知られ、中世における不明図像が近世における転写本によって、詳細が知り得たものなのであった。今後も大いに活用できるものと思われる。

21 年度の調査所蔵先であるメトロポリタン美術館、バーク財団、ニューヨーク・パブリックライブラリーのスペンサーコレクションについては、データ整理が完了した段階なので、考察には至らなかったが、それぞれ玄証本及び旧高山寺本の一特色を示すものが見いだされており、今後の研究課題となるものである。

個人宅にての調査では旧高山寺本の六観音灌頂図という作例が注目される。図像は聖観音を中心に十一面や馬頭など観音を配した敷曼荼羅のような図様であり、『別尊雑記』や『覚禅鈔』などに類似する図像をみることができないものである。また、六観音灌頂という語句自体もあまり耳にしない灌頂であり、今度、この灌頂儀礼を含めて図像の典拠や事例について考察せねばならない研究対象である。

以上、研究成果であるが、玄証本及び旧高山寺本にはある特定の真言法脈の流派やある特定の時期にのみ用いられたと思われる図像が多いのである。なかにはサンフランシスコ・アジア美術館蔵の文殊菩薩図のように後世に多大なる影響を及ぼしたと判じられる図像もあるが、それは一部であるようであり、結果的にそうなったと考えた方が良いように思われる。

逆にいえば、希有な図像であり、希有な修法次第の描写であるが故に、転写され、経蔵に保存されたと考えた方が良いと思われる作例もある。

しかし、他に影響を与えていないからといって、研究の対象外にするものではなく、それほどに密教修法と密教図像に冠しては、様々な図像、そしてイメージが開花していた時期が、平安時代末期から鎌倉時代初期であると考えるべきであろう。

また、図像研究において、どのような図様が流布し、なにが埋没していったかを考える契機になると思われる。図像から画像へと制作される場合、取捨（選択）が必ずある。それが時代背景であったり、思想であったりするが、その選択需要についても考察すべきであろう。

また、図像そのものの基礎的研究の副産物として、明治時代に密教図像が巷間に流布し、好事家の所蔵するところとなった状況や公的機関に所蔵されるまでの所有履歴などの経緯についてもこの度も研究で明らかにすることができた。また、古美術商を通じて入手したコレクターの種々相など、近代における美術品流通の姿も垣間見ることができた。従来、茶道具や平安仏画など高額で注目される美術作例等については、報告あるいは語られることはあっても、密教図像についてはほとんどなかったので、興味深い点となったのである。

美術品の流通という点でも研究対象になりうるテーマであると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

１　内田啓一「サンフランシスコアジア美術館蔵文殊菩薩図像について」(『佛教藝術』310 号、2010 年５月）　※本研究の成果であることを論文末尾に付記した。研究課題・研究番号等。査読有

２　内田啓一「根津美術館蔵善光寺如来縁起絵いついて」(『佛教藝術』307 号、2009 年 11 月)、査読有

３　内田啓一「密教図像にみられる十二支について」(川瀬由照『十二支』日本の美術№518 所収、ぎょうせい、2009 年７月）　※この論文は本研究の直接的な成果ではないが、派生した図像問題について言及したものである。査読無

４　内田啓一「高山寺旧蔵本神泉苑請雨経法道場図について」(『昭和女子大学文化史研究』12 号、2009 年 3 月　※本研究の成果であることを論文末尾に付記した。研究課題・研究番号等。査読無

５　内田啓一「西大寺叡尊と弥勒来迎図－東京藝術大学大学美術館本を中心に」(『佛教藝術』302 号、2009 年１月)、査読有

６　内田啓一「書物におけるビジュアルエデュケーション」(『アートフォーラム２１』17 号、2008 年５月)、査読無

７　内田啓一「中世に開板された版画の板木」(『昭和女子大学文化史研究』９号、2007 年 12 月)、査読無

８　内田啓一「長谷寺式十一面観音菩薩画像について」(『佛教藝術』294 号､2007 年９月)、査読有

〔図書〕（計３件）

１　内田啓一監修、仏教美術を極めるⅡ『浄

土の美術』全 175 頁（東京美術、2009 年１月）
２　内田啓一監修、仏教美術を極めるⅠ『密教の美術』全 175 頁（東京美術、2008 年 4 月）
※本研究成果の一部が反映されている。
３　内田啓一「法金剛院本清涼寺大念仏縁起絵巻について」（『美術の杜』所収、竹林舎、2008 年 9 月）（225-239 頁/全 615 頁）

〔その他〕
（１）　研究代表者
内田　啓一（UCHIDA　KEIICHI）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：（３０３２７９５２）

（２）　研究分担者
なし

（３）　連携研究者
なし